

今や、かくしようもなくなった 動労の意識分裂！

4日間の暴行で鮮明に自己暴露！

中央「本部」暴力集団は、いやがる組合員をどう喝をもつて、全国からかき集め、動労千葉破壊の先兵に仕立てあげて、目的意識的に中央「本部」の意のままになる「千葉地本再建」を目論み、四月二十八日から四日間「全国オルグ」と称する破壊策動を行った。林委員長までかり出し、連日一〇〇〇名を越える「オルグ団」を投入しながら強行されたこの「オルグ」は、一片の「成果」も上げられなかったばかりか、より一層の内部亀裂と敗北感、消耗と自己不信の深化という形で動労四万八千の意識分裂の状況を赤裸々に自己暴露した。われわれはこの四日間の闘いによって、動労千葉の偉大な勝利の展望を指し示した。

動労千葉一四〇〇名が勝利した核心点は何か

それは何よりも動労千葉の闘いの正義性と一四〇〇名組合員の不拔の団結力である。われわれの動労大改革に向けたかぎりない確信を支えてきたものは、常にこの闘いの正義性と鉄の団結であった。

中央「本部」暴力集団がいかにか言とどろ喝、暴力をもって敵対してきても、労働者の心は動かさないのだという真理をこの四日間の闘いの経過は、はっきりと示している。

動労全国四万八千の仲間をはじめとする全労働者・人民に訴える！ 今こそ、動労千葉とともに動労の大改革に向け決起してゆこうではないか。

チグハグな「オルグ団」何のために来たのか！

四日間のわれわれの闘いは、全組合員の毅然たる態度をもって「全国オルグ」を粉砕し切った。例えば、五月一日、千葉運転区庁舎前における「オルグ団」の「本部」総括集会の中に特徴的に示されている。福本八門司地本委員長は「組合員は動労に残りたいという顔をしていた」と言い、立石八門司地本副委員長は、「四日間のオルグはなんらの成果も上げられなかった」と全く正反對の発言をしている。組合歌合唱に至っては、全く声も出ないオソマツなものであった。

林委員長は、「千葉転支部の組合員は全て動労の組合員だ、だからオルグを受け入れてほしい」と言っている。入り込もうとし、「俺たちの委員長は関川委員長しかいない、帰れ」の声に呆然と立ち尽くしていた。

さらに、驚くべきことに、「オルグ団」の代表は、動力車新聞、とりわけ「オルグ」資料である号外を全く読んでいないで動労千葉に「オルグ」に入っているのである。ひとつあげれば、三里塚

・ジェット闘争について「関川・中野の裏切り」（「中央本部」・暴力集団のいつていること）を追及したところ、門司地本委員長は、はっきり「あれは中央「本部」で仕切ったものだ」といつている。これこそ一部反動分子の引きまわし以外のなものでもない。

心ある組合員は4・11錦糸町襲撃、4・17津田沼事件については全く知らされていないのが、「オルグ」の中ではっきりとした現実である。

奇襲をかけ、活動家を傷つけ、組合事務所の鍵をこわし、盗みを働く、鉄輪旗、ヘルメット、はては女子職員の私物さえ持ち去る行為、そして乗務中の組合員に対し集団でどう喝を加える、これが「動労オルグ団」の実態である。労働者としての「オルグ」なのか、事態は鮮明ではないか。「中央本部」はその上で何を「オルグ」しようというのか。

メーデー会場にまでおしかけ排除された「オルグ」団！

こうした理不尽極まりない「オルグ」ならざる「オルグ」を行う一方、最終日には、こともあるうに千葉県中央メーデー会場に押しかけるに至ったのである。常軌を逸したこの行為に対し、会場に結集した千葉県下の労働者から湧き上るような追及の声が集中したことは当然である。この追及の声に消耗した「オルグ」団は、県労連傘下の労働者に排除されすくすく千葉駅に引きあげていったのである。

メーデーの本質すら理解できず、労働者の心を失った「本部」暴力集団の存在をわれわれは、決して許さない。

四日間の「オルグ」をとおして、動労大改革の展望ははっきり見えてきている。さらに一〇〇％団結署名完遂と全支部の結成大会成功に向けて前進しよう。